

平成25年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成25年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 ソウハチ

学名 *Hippoglossoides pinetorum*

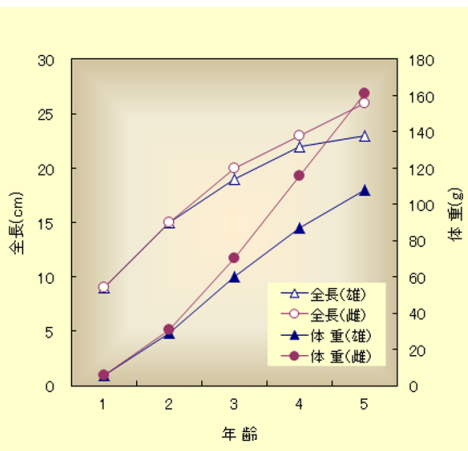
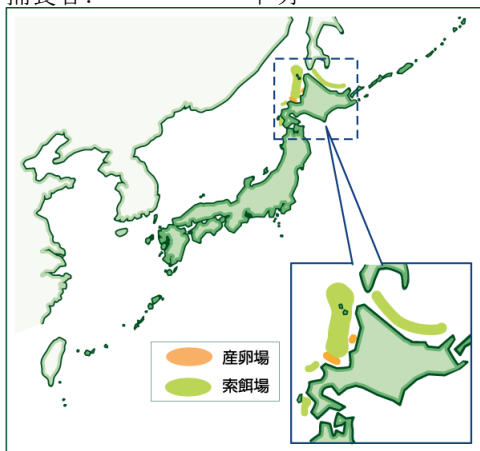
系群名 北海道北部系群

担当水研 北海道区水産研究所



生物学的特性

寿命: 7歳以上
成熟開始年齢: 雄2歳(50%以上)、雌3歳(50%以上)
産卵期・産卵場: 5～9月(中心は7月)、主に奥平沖(水深60～80m)と増毛～留萌沖(水深50～60m)
索餌期・索餌場: 北海道の日本海側～オホーツク海側の沿岸
食性: 成魚はイカナゴ、タラ類幼魚、その他の小型魚類、オキアミ類、クモヒトデ類、多毛類、イカ類、エビ類、二枚貝類
捕食者: 不明

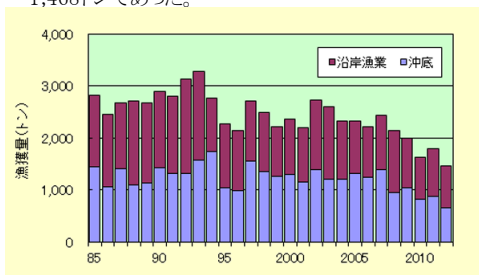


漁業の特徴

本系群の大部分は、沖合底びき網漁業(沖底)と刺し網漁業によって漁獲されており、沖底による漁獲が半分程度を占めている。沖底は主に9～4月に索餌群を、刺し網漁業は主に4～7月に産卵群を漁獲している。また、日本海に比べると、オホーツク海における漁獲量は非常に少ない。

漁獲の動向

沖底の漁獲量は、1980および1981年には2,000トンを上回っていたが、1982年に1,655トンに減少し、その後も現在まで減少傾向にある。2012年の漁獲量は、654トンであった。沿岸漁業の漁獲量は、1980年代後半から1992年にかけて増加し、1992年には1,828トンに達した。しかし、その後は増減を繰り返しながらも長期的には減少傾向にある。2012年の漁獲量は814トンであった。沖底と沿岸漁業を合わせた漁獲量は、1980年代後半から1993年にかけて増加し、1993年には3,273トンに達したが、その後は現在まで長期的に減少傾向にある。2012年の漁獲量は、過去最低の1,468トンであった。



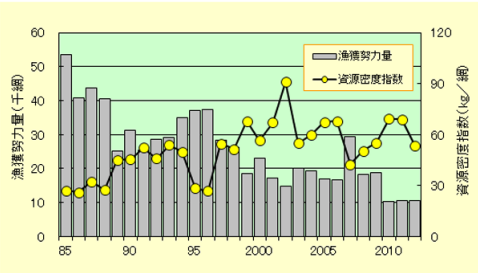
資源評価法

本系群の資源状態の判断には、沖底の資源密度指数を用いた。資源密度指数は以下の方法で計算した。まず、月別船舶別漁区統計値よりソウハチの有漁操業(ただし、かけまわし100トン以上に限る)の値のみを抽出し、各年について個々のCPUE値を緯度経度10分単位の漁区ごとに平均した。その後、漁区別の平均CPUEの合算値を各年の有漁漁区数で割ることにより、各年の資源密度指数を算出した。

資源状態

沖底の資源密度指数は、1980～1984年には47～77kg/網で推移していたが、1985年に減少し、1985～1988年には30kg/網前後で推移した。その後は増減を繰り返しながらも増加傾向で推移し、2002年には91.0kg/網と最大の値を示した。2003年には再び減少したが、2003年以後では40～70kg/網で推移しており、2012年は53.4kg/網であった。過去33年間(1980～2012年)における推移および過去5年間(2008～2012年)における変化から、資源水準および動向はそれぞれ中位で横ばい傾向と判断した。





管理方策

資源量指標値の水準および変動傾向に合わせた漁獲を行い、現在の資源水準(中位)以上を維持することを管理目標とした。ABC算定規則2-1)に基づき、沖底の資源密度指数の水準および変動傾向に合わせて漁獲する場合の漁獲量をABClimitとし、不確実性を見込んだ漁獲量をABCtargetとした。

	2014年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	10百トン	$0.8 \cdot C_{2012} \cdot 0.88$	—	—
ABCtarget	8百トン	$0.8 \cdot 0.8 \cdot C_{2012} \cdot 0.88$	—	—

- ABC算定規則2-1)に基づき、ABCは $ABClimit = \delta_1 \cdot Ct \cdot \gamma_1$ 、 $ABCtarget = ABClimit \cdot \alpha$ で計算した
- γ_1 は、 $\gamma_1 = 1 + k(b/l)$ で計算をし、kは係数(標準値の1.0)、bとlは資源量指標値の傾きと平均値(直近3年間)である

資源評価のまとめ

- 資源状態を沖底の資源密度指数に基づき判断した
- 資源状態は中位、動向は横ばい

管理方策のまとめ

- 資源量指標値の水準および変動傾向に合わせた漁獲を行い、現在の資源水準(中位)以上を維持することを管理目標とした

執筆者: 田中寛繁・船本鉄一郎

資源評価は毎年更新されます。